

バロック期の二大手稿舞踏譜集の資料研究

——12の頻出振付の比較を中心に——

赤塚 健太郎

1. 研究の対象と方法、目的について

1-1 問題の所在

舞踏史を振り返ってみると、過去の舞踏を再現可能な形で具体的に伝えてくれる資料が乏しいことに気がつく。そうした中で、例外的に過去の舞踏の振付を克明に伝えてくれるのが、18世紀にヨーロッパで用いられていた舞踏譜¹⁾である。そもそも舞踏記譜法の研究は、17世紀のフランスで、国王ルイ14世（1638-1715、在位1643-1715）の命によって始まった。その成果が1700年に舞踏家R=A. フィエ Raoul-Auger Feuillet（1659/60-1710）による著作『コレグラフィ Chorégraphie』²⁾として公刊されると、以後、同書において提示された舞踏記譜法に従って多数の舞踏譜が作成されるようになった。

しかしながら、舞踏譜に対する資料研究はあまり進んでいない。従来の舞踏譜研究は、過去の舞踏を復元したいという舞踏史研究の立場や、当時の舞曲の演奏解釈において実際の舞踏を参考にしようとする音楽史研究の立場から促進されてきた。いずれにせよ歴史的舞踏の復元とその実践が重要視されてきたのであり、資料に関する学問的な調査や評価は等閑にされてきたのである。特に事態が深刻なのは、手書きの舞踏譜（以下、手稿舞踏譜と呼ぶ）についてである。18世紀には舞踏譜の出版が盛んに行われたが、それらの出版された舞踏譜（以下、出版舞踏譜と呼ぶ）については、振付者や出版時期が明らかとなっていることが多い。一方で手稿舞踏譜については、それが何年頃に成立したのか、また誰によって書き記されたのかといった基本的な情報が欠けている場合が多い。

そうした資料に関わる基本的な研究を欠いたまま、舞踏復元とその実践だけが先走っているのが現状なのである。

こうした状況を鑑み、18世紀の手稿舞踏譜に対する資料研究の方法を模索し、実際に現存資料を対象にその方法を実行することが本研究の目的である。しかし現存する多数の手稿舞踏譜を一度に研究対象とするのは困難であり、まずは対象を限定する必要がある。

1-2 対象となる2つの手稿舞踏譜集

本論文では、数多くの手書きの舞踏譜の中から、フランス国立図書館において Ms. fr. 14884 という番号で所蔵されている資料と、同じくフランスのオペラ座図書館において Rés. 934 という番号で所蔵されている資料を研究対象とする（以下、両資料をそれぞれの所蔵番号で呼ぶ）。いずれも多数の手稿舞踏譜を収録した舞踏譜集である。両資料を対象とする意義について、先行研究を概観しながら確認しよう。

舞踏譜に関する資料研究としては2つの重要な先行例がある。それは現存する舞踏譜の情報を集めた舞踏譜カタログであり、M.=E. リトルと C. G. マーシュによるカタログ³⁾ と、F. ランスロによるカタログ⁴⁾ の2種がこれまでに出版されている。両カタログともに現存資料に関する豊富な情報を盛り込んでおり、舞踏譜という歴史資料に関する情報源として貴重な存在である。特にランスロのものは、「巻頭の考察 RÉFLEXIONS LIMINAIRES」⁵⁾ と題された舞踏譜に関する大規模な資料調査の報告と論考によって始まっている。これは現存する舞踏譜に対する資料研究としては、最も充実したものといえよう。

このランスロによる論考では、劇場用舞踏譜と舞踏会用舞踏譜の割合、舞踏種ごとの舞踏譜の数、振付家ごとの舞踏譜の数に関する統計的考察などが行われている。加えて舞踏譜の成立年代の議論にも踏み込み、現存する舞踏譜の成立年代分布を図示することを試みている。しかし、ここで大きな障害となる2つの手稿舞踏譜集が存在する。それが Ms. fr. 14884 と Rés. 934 なのである。なお、ランスロのカタログは Ms. fr. 14884 に Ms. 17.1 という資料番号を、Rés. 934 に Ms. 18.1 という資料番号を与え、それぞれの内容について詳しく伝えている⁶⁾。一方、リトルらによるカタログは前者に Ms-30 という資料番号を、後者に Ms-70 という資料番号を与え、やはり詳細な情報を伝えている⁷⁾。

これらは他の多くの手稿舞踏譜と同様に、成立年代も筆写者も不明の資料であるが、Ms. fr. 14884 は 75 点、Réss. 934 は 57 点と、いずれも群を抜いて多くの舞踏譜を収録しているため、両資料の成立年代をどのように判断するかによって現存する舞踏譜の成立年代分布の全体像が大きく揺らぐという問題を抱えている。実際にランスロが試みた舞踏譜の成立年代分布図を検討してみよう。

図 1 と図 2 はランスロのカタログから転載したもので、いずれも現存する舞踏譜の点数を 5 年区切りで示したものである。なお舞踏譜は「主要資料で、成立年代が確定されるもの Sources principales, datation sûre」、 「主要資料で、成立年代が推定されるもの Sources principales, datation probable」、 「二次資料で、成立年代が確定されるもの Sources secondaires, datation sûre」、 「二次資料で、成立年代が推定されるもの Sources secondaires, datation probable」

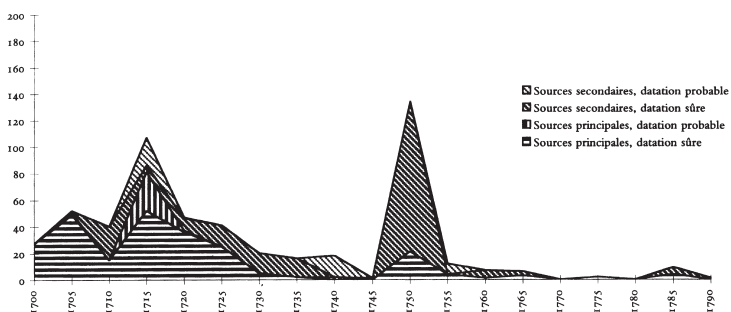


図 1 第 1 の仮説に従った舞踏譜の成立年代分布⁸⁾

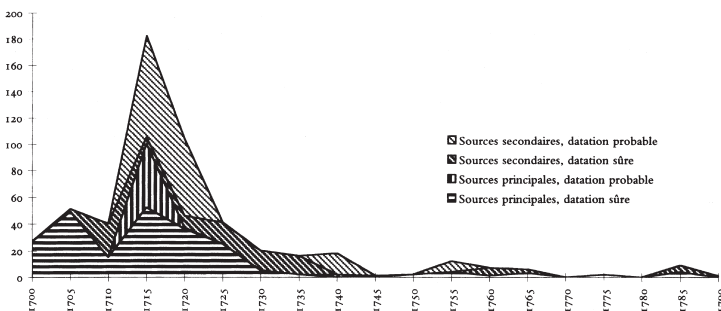


図 2 第 2 の仮説に従った舞踏譜の成立年代分布⁹⁾

secondaires, datation sûre]、「二次資料で、成立年代が推定されるもの Sources secondaires, datation probable」に四分して数えられている。ここでいう主要資料と二次資料については、「主要資料とはある振付が最初に現れた資料を意味し、二次資料とは後に続いて現れたもの全てを意味する Par source principale, nous entendons la première occurrence d'une pièce, et par source secondaire toute occurrence suivante」¹⁰⁾と定義されている。

成立年代分布が2つの図に分かれているのは、Ms. fr. 14884と Rés. 934の成立年代に関してランスロが2つの仮説を立てているからである。図1は、Ms. fr. 14884の成立を1748年、Rés. 934の成立を1750年とする第1の仮説に基づいている（詳細は次節で述べる）。その結果、舞踏譜の成立年代分布は、全体としては1715年を頂点とし、以後漸減していく傾向を示しつつも、1750年に第2の頂点が生じて全体の傾向を乱している。

一方、ランスロは第2の仮説も立てている（詳細は次節で述べる）。この仮説ではMs. fr. 14884の成立を1710年から20年、Rés. 934の成立を1714年から25年のこととし、それに従って図2が作成されている。こちらの分布では、1715年を頂点に漸減していくという全体的な傾向が、2つの手稿舞踏譜集によってむしろ強調されている。ランスロは、より一貫しており、資料の全体像ともより均質的であるとの理由から、第2の仮説に基づいて資料に関する議論を進めていく¹¹⁾。しかし、全体の表面的な整合性を優先して特定の資料の成立年代を左右するような態度は、本来資料研究においては慎むべきものだろう。無論、ランスロもそうした批判には自覚的であり、「我々の主張は、現状では未検証にとどまっていると確かに自ら認めるものである nous convenons bien volontiers que notre proposition reste invérifiable pour l'instant」¹²⁾と断っている。なおトリラによるカタログは、両資料の成立年代特定にまでは踏み込んでいない。

このように2つの手稿舞踏譜集は規模の点で大きな存在であり、両資料についての理解が、現存する舞踏譜全体に対する理解を左右するような重要性を持つ。よって手稿舞踏譜に関する研究においては、対象として優先的に扱われるべきであろう。それにとどまらず、これらの2つの手稿舞踏譜集は、ランスロが選び出した12の頻出振付の全てを含むと

いう点で内容面でも興味深い存在である。ここでいう頻出振付とは、主要資料の他に5つ以上の二次資料によって伝えられている振付のことであり、ランスロの資料調査の報告の中で挙げられている¹³⁾。これら12件の振付を全て収録した舞踏譜集は、現存する資料を通じて Ms. fr. 14884 と Rés. 934 の2例だけである。

他の資料と同じ振付を収録しているということは、資料に関する調査を行う際の有力な手がかりとなる。同じ振付でも、舞踏譜によって若干異なる内容が記されていることは多く、その差異を手掛かりにすることで資料間の伝承関係が推定されるからである。執筆者は、既にクーラントの振付である La Bocannes を対象として現存する舞踏譜の比較を行い、その伝承関係について考察している¹⁴⁾。その際には1つの振付のみを対象としたが、複数の舞踏譜集に共通して含まれる振付の比較を行うことは、舞踏譜集間の伝承関係を解き明かす手がかりを得る方法として期待される。そうした比較の対象としては数多くの資料に頻出する振付を多数収録している例が好都合であるのはいうまでもなく、12の頻出振付を全て収録しているという点でも2つの手稿舞踏譜集は極めて興味深い存在といえる。

1-3 具体的な研究方法とその目的

本研究では Ms. fr. 14884 と Rés. 934 という2つの手稿舞踏譜集を対象として、資料に関する調査を行う。しかし資料の調査といっても、その方法や目的には様々な可能性があるだろう。本項では研究の具体的な方法と目的を明確にしておこう。

手稿舞踏譜そのものを調査しても、一般にそこから成立年代や筆写者を突き止めるだけの手がかりはあまり期待できない。一方、前項で述べたように、内容の比較という点からは振付の伝承経路や手稿舞踏譜集の筆写関係などを推定する手がかりを得ることが期待される。よって、本論文では、まずリトルらのカタログとランスロのカタログによってなされている両資料についての考察を検討し、その上で両者に共通して含まれる振付に関する舞踏譜の記載内容の比較を行う。ただし2資料に共通して含まれる振付は52件と非常に数が多い。そこで対象を12の頻出振付に限り、舞踏譜に付された伴奏舞曲も含めて細部まで比較していくこととしよう。こうした同一振付を伝える複数の資料の細部にいたる比較

という研究方法は、これまでほとんど試みられていないものである¹⁵⁾。よってその成果は、両資料の成立に関して新たな知見をもたらしてくれるものと期待される。

2. 2つの手稿舞踏譜集の構成に関する考察

2-1 Ms. fr. 14884 の概要

本節では、2つの手稿舞踏譜集の全体的な比較を行う。そのための情報は、既述のとおり現行の2つのカタログから得ることができる¹⁶⁾。加えて、執筆者は両資料の所蔵機関から資料全体の複写を入手し、さらに両資料の所蔵機関に実際に赴いて実物を手に取って調査を進めた。なお各資料の形状や外寸といった情報については、本研究では立ち入らない。

まず、Ms. fr. 14884 の概要から確認しよう。この資料では、ファイエの『コレグラフィ』によって確立された記号で当時の舞踏の基本的なパ(ステップ)を記した冒頭部分に続いて、75点の舞踏譜が現れる。これは現存する舞踏譜集の中でも最大のものである。

リトルらの舞踏譜カタログは、Ms. fr. 14884 のみに確認される舞踏譜は7点だけであり、他の68点は全て他の資料に同じ振付が確認されるものであることを指摘している。特に53点の舞踏譜は、リトルらのカタログによれば、1700年から1709年の間にファイエによって出版された舞踏譜の中に同一の振付が確認され、出版舞踏譜から直接に、あるいはなんらかの中間資料を経て間接的に筆写されたと想定されている。ランスロのカタログにも同様の記述があるが、期間が「1700年から1710年の間」となっており1年ずれている。これは、53点の中に、出版年が曖昧な舞踏譜が含まれるために生じた齟齬である。

リトルらのカタログは、この資料の冒頭に「Deslan氏によって作られた」との書き込みがあることを指摘している。ランスロのカタログは、この書き込みをDescanと読み、舞踏譜の筆写者とは異なる人物の筆跡であると報告している。DeslanないしDescanなる人物については、具体的な情報は何も知られていない。加えてランスロは、資料の冒頭に「1748」という書き込みがあることから、資料の成立年代を1748年とする第1の仮説を提示している。この数字の書き込みも舞踏譜とは異なる

筆跡による。

しかしランスロはこの仮説に対して懐疑的である。それは、資料に18点の劇場用の舞踏譜が含まれているためである。劇場用の舞踏は技術の変化が激しく、18世紀半ばにはフイエの記譜法が劇場で用いられることはなく、1748年という成立年は信じがたいとするのである。そこで、1710年までの出版舞踏譜と同一振付の舞踏譜が多く含まれることなどを根拠として、資料の成立を1710年から20年とする第2の仮説を提示している。

この2つの仮説は、いずれも信憑性に欠ける。「1748」という4ケタの数字の書き込みは、確かに別の筆跡に見えるし、そもそも成立年を示したものであるという保証はない。よってこれを資料の成立年とは断じがたい。一方、第2の仮説も決め手に欠ける。18世紀の半ばに劇場においてフイエ式の記譜法が用いられていなかったとしても、舞踏会では使われていた可能性がある。そして、劇場用の振付を記した舞踏譜が、舞踏会で用いられていた可能性もある。当時は、劇場用の舞踏と舞踏会用の舞踏には技術上の共通点が多く、劇場用のレパートリーが舞踏会に浸透することもあったと考えられているからである¹⁷⁾。

2-2 Rés. 934 の概要

次に Rés. 934 の概要を確認しよう。この資料は第337頁から始まっている。よって、両カタログとも、より大規模な資料の一部のみが現存していると想定している。もともと、現存部分だけでも57点の舞踏譜を含み、Ms. fr. 14884に次ぐ規模となっている。

成立年や筆写者に関する情報は何もないが、ランスロは Ms. fr. 14884 と Rés. 934 の筆跡が同一人物によるものであることを指摘している。実見しても、舞踏譜の記号から併記されている伴奏舞曲の楽譜、舞踏譜のタイトルに見られる文字などを通じて両資料の筆跡は酷似しているため、執筆者もこの点については異見を持たない。

Rés. 934 の舞踏譜のいくつかは冒頭に年号が併記されている。また資料の末尾に収録内容の目次が付けられているが、そこにおいてもいくつかの舞踏譜には年号が併記されている。舞踏譜は、概ねこの書き込まれた年号の古いものから順に並べられている。

Rés. 934 のみに確認される振付を記した舞踏譜はなく、57点のいず

れもが、何らかの資料に含まれる舞踏譜と同一振付を示している。中でも43点の舞踏譜は1700年代初頭に出版された舞踏譜集の中に同一振付の舞踏譜を見出すことができる。その出版舞踏譜が出た期間をリトルらは「1700年から1714年」、ランスロは「1700年から1713年」としている。このずれは、Ms. fr. 14884の場合と同様、出版年が曖昧な資料が含まれているために生じたものである。同一振付を含む出版舞踏譜集の出版年を比較すると、Ms. fr. 14884よりも Rés. 934の方により後のものが見られるため、ランスロは後者の方が遅い時期に成立したと考えている。そのため、第1の仮説では Rés. 934の成立を1750年、第2の仮説では1714年から1725年の間としている。

ただし、Ms. fr. 14884よりも Rés. 934の方が後に成立したと決定づける直接の証拠はない。1714年よりも後になってから、先に Rés. 934の方が成立した可能性は存在するからである。そもそも、出版舞踏譜の内容が、出版よりも先に手稿舞踏譜に記される可能性も否定しきれない。これは、出版される前から手書きの舞踏譜によって振付が広まっていた可能性や、そもそも振付が成立して以来、一度も記譜されることなくひたすらに口承で広まっており、それが何らかの理由で書きとめられた可能性も捨てきれないためである。

2-3 2つの手稿舞踏譜集に共通する振付

個別の概観から明らかのように、2つの手稿舞踏譜集の成立事情について確実に言えることは少ない。いずれが先に成立したかという点についても、確定的な答えを出すことはできないだろう。しかし両者の関係を推測する手がかりは残されている。それは共通する振付を記した舞踏譜の比較である。

2資料に共通して含まれる振付は52件である。その全てに対して一度に詳細な研究を行うのは困難であるので、この中から、上述のランスロの基準に従い他の資料にも頻出する12件を列挙したものが表1である。ここでは、リトルらのカタログで用いられている舞踏譜の整理番号を併記した。また舞踏譜のタイトルも、2つの手稿舞踏譜集に見られるものではなく、リトルらの舞踏譜カタログの表記に従った。項目「初出出版資料の出版年」では、各振付が最初に記された出版舞踏譜の出版年を記した。なお表1では、出版年の古いものから掲載している。この

表 1 12 の頻出振付

タイトル	整理番号	Ms. fr. 14884 での掲載頁	Rés. 934 での掲載頁	初出出版資料 の出版年
la Bourée d'Achille	1480	224-234	417-427	1700
La Mariee	5360	37-48	337-346	1700
le Passepied	6620	268-276	501-509	1700
la Bourgogne	1560	250-258	475-486	1700
la Forlana	4800	351-356	371-376	1700
Aimable Vainqueur	1180	362-367	365-370	1701
L'Allemande	1200	1-12	563-572	1702
La Bretagne	1620	287-294	601-608	1704
la Bacchante	1280	322-329	629-636	1706
Le Menuet d'Alcide	5600	406-417	673-684	1709
la Gouastalla	5120	202-207	699-704	1709
la Nouvelle Forlane	6320	491-498	705-712	1710

12 件は全て一組の男女のための振付である。次節ではこの 12 件について、詳細な比較を行う。

3. 12 の頻出振付の比較

3-1 比較の方法

同一振付を伝える舞踏譜の比較に移る前に、舞踏譜で用いられる記譜法の概略を示そう¹⁹⁾。舞踏譜の最上部では、その頁で用いられる伴奏舞曲の楽譜が単旋律で示される。その下に、独自の記号で振付が記される。その振付部分の例を図 3 に示した。

振付は俯瞰図のような形で記される。まず、その頁における踊り手の出発点と体の向きが半円のような印で示されている。そこから上に伸びる線が踊り手の進行方向を示す。同時にこの線は時間軸も兼ねており、この線に直交する短い線が伴奏舞曲の小節線に相当する。この例では、男女が 2 小節間前進した後、左右に分かれていく。足の構え（ポジション）は、最初に置かれる足の位置であり、小さな円が踵を、そこから伸びる線がつま先の方角を示す。図 3 では男女の内側の足先に点が見られるが、これは爪先立ちを意味する。そこからパの具体的な指示が上方へ

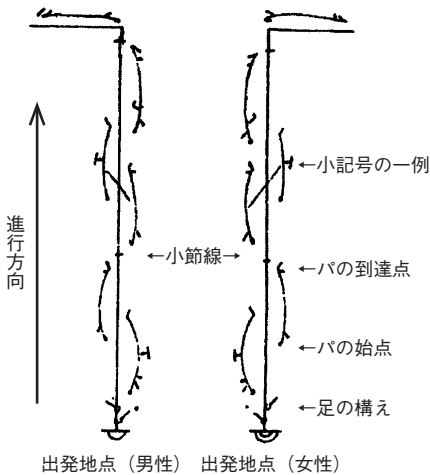


図3 舞踏譜の例¹⁸⁾

と連なっている。パの概要は、始点と到達点の位置によって示される。図の女性では、右足が前に出た状態で構え、1小節目では左足を前に出し、続いて右足を前に出す。パの始点と到達点を結ぶ弧線からは、脇に様々な小記号が伸びており、これがより細かい動きを指示しているが詳細の説明は省略する。

舞踏譜の比較は、次項において表によって進められる。まず表のキャプションにおいて

表1と同様にリトルらのカタログに従って対象となる舞踏譜のタイトルを示し、続いて括弧に入れて Ms. fr. 14884 と Rés. 934 における実際のタイトル表記をそのまま示す（スラッシュの前が Ms. fr. 14884 のもの）。

さらに両者の細かな違いを表内で挙げていく。項目「頁と小節」では、指摘する相違の位置を頁数と小節番号で示す（コロンの前が頁数）²⁰⁾。この際、一方の資料で2頁に分かれている内容を他方では1頁にまとめて記述するような箇所が見られるため、頁は便宜上 Rés. 934 の形態に従って示す。小節内での位置の特定は、記述が煩雑になるので省略する。なお踊り手の各頁における出発点を示す記号は、便宜上1小節目に属するものとみなす。

項目「該当箇所」では、指摘が伴奏舞曲に対するものか（「曲」と表記）、あるいは男女の振付に関するものかを示す（「男」か「女」、また男女双方についてなら「男女」と表記）。

伴奏舞曲については、音高の違いや音価の違い（それぞれ「高」と「価」）、装飾音記号や臨時記号、拍子記号の違い（それぞれの記号で表記）を指摘する。さらに、伴奏舞曲の表記に反復記号を用いている場合は「反復」と、誤って同じ小節が余分に連続して書き込まれている場合は「余分」と、また次の頁に書かれるべき上拍が前の頁の最後に現れて

いる場合は「上拍」と示す。またスラーの相違については「s」と示す。

振付に関しては、パの始点と到達点が示す足の動き（「足」と表記）、構えの記号に付けられるつま先立ちを示す点（「点」）の相違を指摘し、さらにパを示す線から脇に伸びる小記号についても相違を略号で示す（プリエ：P、エルヴェ：E、ピエ・アン・レール：p、グリセ：G、ソテ：S、回転：T）。また、手を繋ぐ指示と繋いだ手を放す指示の違いをそれぞれ「M」、「m」と表記する。加えて休符の違いは「休符」、動作のタイミングを明示するための二重のリエゾンの違いは「二重」、男女の出発点を示す印の誤りは「性別」と示す。

一方の資料に記号や指示などが存在し、他方に無い場合は、存在する側だけにそれを記す。明らかに誤記と断じられるものは下線付きで示す。具体的には、伴奏舞曲の楽譜における必要な臨時記号の脱落、あるいは同一動作の反復における小記号の欠如などが該当する。記号が無いことが誤りにつながっている場合は、「無」と示す。

3-2 各振付の比較

以下、前項の方針に従い、表1の順で12の頻出振付を伝える舞踏譜の比較を行う。

表2 la Bourée d'Achille (La bouree D'achille/ La Bourree D'achille) の資料比較

頁と小節	1:3	1:5-8	1:7	1:8	2:6	2:7	3:1	4:5-8	4:10	5:2
該当箇所	曲	曲	曲	女	男女	曲	男	曲	曲	曲
Ms. fr. 14884				T					#	#
Rés. 934	#	反復	#		T	+	<u>P</u> , <u>E</u>	反復	<u>無</u>	<u>無</u>

頁と小節	5:6	6:1	7:1	7:2	8:1	8:2	8:5	8:5	9:3	9:3
該当箇所	曲	男女	女	曲	男女	曲	男女	男	曲	男女
Ms. fr. 14884	#	T	<u>無</u>	#		#				
Rés. 934	<u>無</u>		M	<u>無</u>	M	<u>無</u>	m	T	#	G

頁と小節	9:4	9:5-8	9:7	9:7	10:3	10:4	11:3	11:11
該当箇所	女	曲	曲	男女	曲	男女	曲	曲
Ms. fr. 14884		反復						
Rés. 934	<u>E</u>		#	G	<u>価</u>	T	<u>価</u>	<u>価</u>

※第4頁14小節目と、第7頁と第8頁の6小節目に両資料とも必要な#の脱落が見

られる。

表3 La Mariee (La Vielle mariée/ La Vielle mariee) の資料比較

頁と小節	1:8	1:12	2:6	2:7	2:14	3:2	3:3	3:4	3:8	3:12
該当箇所	男女	曲	曲	男女	女	男女	男女	男女	男女	男女
Ms. fr. 14884	点		s					G		
Rés. 934		+		点	T	M	m		M	m

頁と小節	4:2	4:7	4:7	5:1	5:1	5:3	5:5	6:6	7:2	7:5
該当箇所	男女	男女	曲	曲	男女	男女	曲	曲	曲	曲
Ms. fr. 14884			価	+			+	+	価	価
Rés. 934	M	m	価		M	M		#	価	価

頁と小節	7:5	7:12	8:3	9:8	9:8	9:12	10:5	10:8	10:10
該当箇所	女	男女	曲	男女	男女	曲	曲	曲	曲
Ms. fr. 14884	S	G	#	点	p	価	+	+	+
Rés. 934	無	T				価			

※Ms. fr. 14884の第7頁と第8頁は、Rés. 934では第7頁にまとめられている。また Ms. fr. 14884の第11頁と第12頁は、Rés. 934では第10頁にまとめられている。

表4 le Passepiéd (Le Vieux passepiéd/ Le vieux passepiéd) の資料比較

頁と小節	1:4	1:8	3:1	3:1	3:2	3:7	3:8	3:10	3:16	5:1
該当箇所	曲	曲	男女	男	曲	男女	曲	曲	曲	男女
Ms. fr. 14884	高価	高価		無	高			高		休符
Rés. 934	高価	高価	M	P	高	m	+	高	+	

頁と小節	5:3	5:11	7:7	9:7
該当箇所	曲	曲	男女	女
Ms. fr. 14884			休符	
Rés. 934	価	価		T

表5 la Bourgogne (Labourgogne/ La Bourgogne) の資料比較

頁と小節	1:2	1:5	2:5	2:6	3:3	4:5	4:5	4:6	4:7	6:3
該当箇所	曲	曲	曲	曲	曲	曲	男女	男女	曲	曲
Ms. fr. 14884	b			2 ²¹)		#				
Rés. 934		+	+	無	+		休符	休符	+	+

頁と小節	6:4	6:7	6:7	7:1	7:3	7:4	7:4	7:5	7:5	7:6
該当箇所	男女	曲	男女	男女	男女	男女	男	女	男女	男
Ms. fr. 14884	点		S	P, E	P, E	P, E	足		P, E	P, E
Rés. 934	p	+	P				足	T		

頁と小節	7:7	7:7	7:8	8:11	9:3	9:5	9:5	9:6
該当箇所	男女	女	男	男女	男	男女	男	女
Ms. fr. 14884	P, E	T	P, E, T	M	P, E, T	M, m		
Rés. 934							p	p

※ Ms. fr. 14884 の第 5 頁は、Rés. 934 では第 5 頁と第 6 頁に分かれている。

表 6 la Forlana (La forlane/ La forlane) の資料比較

頁と小節	1:1	1:4	1:6	3:7	4:2	4:8	5:3
該当箇所	男女	男女	男	曲	男女	曲	曲
Ms. fr. 14884	点			+			
Rés. 934		休符	休符		休符	余分	+

表 7 Aimable Vainqueur (Aymable Vainqueurs/ aymable vainqueurs) の資料比較

頁と小節	1:1	1:5	1:7	1:7	2:4	2:7	3:1	3:1	3:2	3:7
該当箇所	男女	曲	曲	男女	男女	男女	男	女	男女	曲
Ms. fr. 14884		価	+			二重	P, E	P, E		+
Rés. 934	点	価		T	T		S	P, E, S	S	

頁と小節	4:1	4:3	4:4	5:6 ²²⁾	6:15
該当箇所	男	男女	男女	男女	曲
Ms. fr. 14884	性別	休符	休符	T	
Rés. 934				T	+

表 8 L'Allemande (Lallemande/ L'allemande) の資料比較

頁と小節	1:3	1:3	1:6	2:4	3:3	3:4	4:1	4:3	4:5	4:5-7
該当箇所	男女	男女	男女	曲	男女	男女	女	男女	男女	男女
Ms. fr. 14884		P, S				m			性別	足
Rés. 934	二重		休符	高価	m		T	二重		足

頁と小節	4 : 10	5 : 1	5 : 1	5 : 5	5 : 12	8 : 2	8 : 6	8 : 7	9 : 5	10 : 2
該当箇所	曲	男女	男	男女	曲	曲	曲	男	曲	曲
Ms. fr. 14884		性別	M	m	+			m		
Rés. 934	+					+	上拍		+	+

※Ms. fr. 14884 の第4頁と第5頁は、Rés. 934 では第4頁にまとめられている。また Ms. fr. 14884 の第6頁と第7頁は、Rés. 934 では第5頁にまとめられている。

表9 La Bretagne (La Bretagne/ La Bretagne) の資料比較

頁と小節	1 : 1	1 : 1	1 : 1	1 : 5	2 : 1	2 : 5	2 : 8	3 : 3	3 : 12	3 : 13
該当箇所	男	女	男	女	男女	女	曲	男	曲	曲
Ms. fr. 14884		点		m ²³⁾	M		+			+
Rés. 934	点		P, E			T		T	#	

頁と小節	3 : 15	5 : 6	6 : 5	6 : 6	7 : 3	7 : 6	8 : 3	8 : 6	8 : 8
該当箇所	曲	男女	男女	男女	曲	曲	曲	曲	曲
Ms. fr. 14884	+	足	足	足					
Rés. 934		足	足	足	+	+	+	+	+

表10 la Bacchante (La Baccante/ La Baccante) の資料比較

頁と小節	1 : 7	2 : 1	2 : 3	2 : 7	5 : 7	6 : 8	8 : 4
該当箇所	曲	男女	男女	曲	曲	女	曲
Ms. fr. 14884	#	足	足	#	#		高価
Rés. 934		足	足	+	+	M	高価

表11 Le Menuet d'Alcide (Le menuet d'alcide/ Le menuet D'alcide) の資料比較

頁と小節	2 : 2	3 : 4	5 : 3	6 : 3	8 : 4	12 : 2
該当箇所	男女	曲	男女	男女	男女	曲
Ms. fr. 14884	無					
Rés. 934	M	#	T	T	T	#

表12 la Gouastalla (La gouastalla/ La gouästallä) の資料比較

頁と小節	1 : 1	2 : 3	2 : 4	5 : 2	6 : 2	6 : 6	6 : 7
該当箇所	男	曲	曲	曲	女	男女	男女
Ms. fr. 14884		高	高	#		T ²⁴⁾	T
Rés. 934	点	高	高		T		T

表 13 la Nouvelle Forlane (La nouvelle frolane²⁵ / La nouvelle forlane) の資料比較

頁と小節	2 : 3	2 : 4	8 : 2
該当箇所	男女	男女	女
Ms. fr. 14884	足	p	
Rés. 934	足	p	P, S

※ Rés. 934 では誤って、第 3 頁・第 4 頁が、第 5 頁・第 6 頁と入れ替わっている。

3-3 比較結果の考察

前項の各表によって、12 の頻出振付を伝える舞踏譜の間には多数の相違があることが明らかになった。この相違について以下で考察しよう。なお本論文では 2 資料の比較が課題であるため、それぞれの振付の振付者や伴奏舞曲の作曲者などについては立ち入らないこととする。

まず、様々な記号の有無については、一概に一方が正しく一方が誤りとは判断できない。必要な記号が脱落している場合と、余計な記号を誤って記している場合の双方が考えられるからだ。よって前項に列挙した表においても、誤記との判断は最少に留めた。むしろそうした微細な変化をさらに多くの資料と照らし合わせることで、資料間の伝承関係についての新知見が期待されるのであり、それについては研究の次の段階を俟ちたい。

一方、今回対象とした 2 つの手稿舞踏譜集の範囲内では何がいえるだろうか。それも、確言するには 2 資料に共有される 52 件について全て調査する必要があるが、さしあたって今回比較した範囲からは以下のことが指摘できるだろう。まず、両資料共に明らかな誤りを含んでおり、一方が信頼性の点で優越するといった傾向が見られないことである。また、全体的な傾向から判断すると、伴奏舞曲における確認のための臨時記号²⁶ や装飾音記号、振付における回転²⁷ など、必ずしも必要ではない記述が Rés. 934 の側に多く付けられている。よってこちらの資料の方が懇切に記譜されているといえるが、振付 La Mariee (La Vielle mariée/ La Vielle mariee) のように、Ms. fr. 14884 の方が細かく装飾音記号を記している例も見られる。また、誤記と判断することのできる例も、どちらかといえば Rés. 934 の側に多く見出される。

一方で、足の動きや、伴奏舞曲の音高や音価のような重要な要素につ

いては、それほど多くの違いが見られなかった。よって振付が若干の変容を遂げるとしても、それは主に小記号において起き、足の運びや踊り手が平面に描く軌跡は原型が守られる傾向にあるといえる。それぞれの舞踏譜に与えられたタイトル表記にも相違は少なかった。

加えて、上述のように全体的な相違の数は多いものの、表2から表13にかけて列挙される相違の数が徐々に少なくなっていく傾向も明らかに指摘できる²⁸⁾。これらの表は表1の記載順、つまり同一振付を伝える出版舞踏譜の初出の順に並べられている。よって、出版が比較的早い振付ほど多くのずれが生じていることになる。ここから、両資料は長期間にわたって徐々に書き溜められたのではなく、それぞれが何らかの時点で集中的に書き上げられたこと、そして筆写の時点と初出版舞踏譜の出版の時点が離れていれば離れているほど、内容のずれが大きくなったことが読み取られる。

以上の点から判断すると、初出資料が早期に出版された振付については、筆写時に手本とされた資料は、Ms. fr. 14884の場合と Rés. 934の場合で違うものだったと考えられる。同一人物が同一資料から筆写したにしては相違が多すぎるからである。Ms. fr. 14884に関連してリトルらが述べたように、中間資料から書き写した可能性も十分あるし、その中間資料が複数回の筆写を経て細部が様々に変化した舞踏譜であった可能性も考えられる。しかし、なぜ一人の人物が同一の振付について異なる資料を所持し、しかも Ms. fr. 14884の筆写の場合と Rés. 934の場合で違う資料を典拠として用いたのかという疑問が残る。

この疑問については、実際には1つの典拠資料しか用いておらず、Ms. fr. 14884と Rés. 934のどちらか一方が成立した後に様々な修正を書き加え、その後にもう一方が成立したという推測が可能だろう。この場合、相違点の多さから考えて両資料の成立年代はある程度離れていると想像される。もう一つの可能性として、そもそも両資料の筆写者は、資料作成の際に典拠となる舞踏譜を用いず、記憶から書いたということも十分想定できるだろう。記憶から書いたため、細部が曖昧になってしまったと考えれば資料間の相違も十分受け入れられるものとなる。この場合、両資料は近い時期に成立したが、記憶が曖昧だったため記述内容に微細なずれが多く現れたと考えることも許されるだろう。

初出資料の出版が相対的に遅い資料については、相違の少なさから考

えて、同一人物が同一資料から書き写したと判断することも十分可能だろう。ただしこちらについても、記憶から書いた可能性は指摘できる。振付を覚えてから筆写するまでの期間が短く、曖昧さが生じる余地が少なかったとも考えられるからである。

4. 結論と展望

本研究ではバロック時代の二大手稿舞踏譜集である Ms. fr. 14884 と Rés. 934 について、既存の研究を確認した上で、12 の頻出振付を伝える舞踏譜の比較を通じて調査した。既存の研究の中でもランスロのカタログは、それぞれの成立事情について踏み込んだ仮説を立てているが、必ずしも同意できる内容ではなかった。また 12 の頻出振付の比較からは、両者がともに誤りを含んでおり、信頼性の点では優劣を付けがたいものであること、また舞踏譜における振付や伴奏舞曲の記述には資料間の相違が発生しやすい要素とそうでない要素があること、そして同一振付を含んだ初出版舞踏譜の出版が早いものほど多くの相違が確認されることが明らかになった。

以上の考察結果から、2つの手稿舞踏譜集の筆写に際し、典拠となる資料を用いることなく記憶から筆写を行っていた可能性も浮上した。これは、純然たる即興の場合を除いては基本的に楽譜という記録媒体を用いる音楽と、実践の場では通常舞踏譜のような記録媒体を手にしない舞踏との違いを明らかにしたことになる。従来行われてきた舞踏譜に関する資料研究は、紙から紙への筆写という音楽における楽譜の伝承のような事例を念頭においていたが、それでは不十分である可能性があることも本研究で明らかになった。

本研究で突き止めた2つの資料間の相違は、さらに2つの発展的な課題の土台となることが期待される。1つ目は、12の振付で確認された記述の傾向の違いが、それぞれの舞踏譜集全体でも一貫して見られるかを検討するという課題である。2つ目は、今回確認された差異を手掛かりとし、頻出振付を収録した他の舞踏譜集をも比較対象に組み込むことで、それらの資料間における伝承関係を解明するという課題である。このように考察を進めることで、2つの手稿舞踏資料の成立事情や12の頻出振付の変遷についてさらなる知見を獲得することが期待されよう。

注

- 1) 本論文では、資料について言及する場合に「舞踏譜」という語を用い、そこに記された舞踏の具体的な内容に言及する場合には「振付」という語を用いる。振付を数える場合には「件」という単位を、舞踏譜を数える場合には「点」という単位を用いる。
- 2) Raoul-Auger Feuillet, *Chorégraphie ou L'art de décrire la danse*, Paris, Chez l'Auteur, 1700.
- 3) Meredith Ellis Little, Carol G. Marsh, *La danse noble: An Inventory of Dances and Sources*, New York, Broude Brothers, 1992.
- 4) Francine Lancelot, *La Belle Dance*, Paris, VAN DIEREN ÉDITEUR, 1996.
- 5) *Ibid.*, pp. XI–LVIII.
- 6) *Ibid.*, pp. 346–348, 368–369.
- 7) Little, Marsh, *op. cit.*, pp. 134–135, 137.
- 8) Lancelot, *op. cit.*, p. XIX. なお、転載元でのキャプションは 'GRAPH. 4 Répartition du corpus selon la 1re hypothèse de datation'。
- 9) *Ibid.*, p. XX. なお、転載元でのキャプションは 'GRAPH. 5 Répartition du corpus selon la 2e hypothèse de datation'。
- 10) *Ibid.*, p. XII.
- 11) *Ibid.*, p. XIX.
- 12) *Ibid.*
- 13) *Ibid.*, p. XXI. なお二次資料は、出版されたものであるかどうかは問わない。
- 14) 赤塚健太郎「舞踏譜《ラ・ボカヌ》と、その伴奏舞曲を伝える諸資料の比較研究」『武蔵野音楽大学研究紀要』第43号(2011年)、23–40頁。
- 15) ランスロのカタログに若干の資料比較が見られるが、それもごく断片的なものである。
- 16) 本項と次項の考察は、特別な断りがない限り、注6と注7に示した箇所を典拠としている。
- 17) 当時の舞踏会の実態については、R. ハリス＝ウォリックの研究が詳しい。Rebecca Harris-Warrick, "Ballroom Dancing at the Court of Louis XIV," *Early Music*, Vol. 14, No. 1 (1986), pp. 40–49.
- 18) Rés. 934の第475頁から抜粋 (la Bourgogneの冒頭に相当)。
- 19) 記譜法や記号、個々の用語の詳細は以下の文献が詳しい。Wendy Hilton, *Dance and Music of Court and Theater*, New York, Pendragon Press, 1997.
- 20) メヌエットとパスピエの記譜に際しては、一般に振付の1小節が伴奏舞曲の2小節に相当する。よって各頁における振付の側の小節番号は、本研究では1小節目、3小節目、5小節目という具合に2小節おきで数えられている。
- 21) 拍子記号の“2”。

- 22) どちらの資料にも回転の記号があるが、付いている位置が異なる。
- 23) 女性側だけに手を離す記号があるが、男性側にも同記号が必要と考えられる。
- 24) Ms. fr. 14884 では 2 小節かけて 90 度ずつ回転する指示になっているが、Rés. 934 では第 7 小節で一度に 180 度回転するようになっている。
- 25) “forlane” の誤記と思われる。
- 26) 調号と重複するため本来は不要だが、確認のために取えて書かれた臨時記号のこと。
- 27) 回転による進行方向の変更は、踊り手の進路を示す線から読み取ることができると、無くても済む場合が多い。
- 28) なお、後に出版された振付の方が全体的に短いといった、規模の違いはない。

使用資料

Paris, Bibliothèque Nationale de France, MS. fr. 14884.

Paris, Bibliothèque-Musée de l'Opéra, Rés. 934.

参考文献一覧

Raoul-Auger Feuillet, *Chorégraphie ou L'art de décrire la danse*, Paris, Chez l'Auteur, 1700.

Meredith Ellis Little, Carol G. Marsh, *La danse noble: An Inventory of Dances and Sources*, New York, Broude Brothers, 1992.

Francine Lancelot, *La Belle Dance*, Paris, VAN DIEREN ÉDITEUR, 1996.

Rebecca Harris-Warrick, “Ballroom Dancing at the Court of Louis XIV,” *Early Music*, Vol. 14, No. 1 (1986), pp. 40–49.

Wendy Hilton, *Dance and Music of Court and Theater*, New York, Pendragon Press, 1997.

赤塚健太郎「舞踏譜《ラ・ボカヌ》と、その伴奏舞曲を伝える諸資料の比較研究」『武蔵野音楽大学研究紀要』第 43 号（2011 年）、23–40 頁。

※本研究は、科学研究費補助金（若手研究 B、課題番号 23720083）の助成を受けて進められた研究の一部である。